

香りには大きく二つのカテゴリーに分類、一つが「祈りの香り」です、もう一つが「癒しの香り」です。
癒しの香りこそインテリア・フレグランス(ルームフレグランス)として、アロマ、お香、アロマキャンドル等が注目されています。
一方、インテリアの消臭に関しては、既に一般化している(ファブリーズ)は有名、一時インテリア業界に於いても消臭カーテン、消臭カーペット等が開発され話題となりましたが、今日では消臭の時代ではない。
ここで提案!「癒しの香り」のテキスタイル開発=癒しの香りカーテン、くッション、カーペット等々・・・香りメーカーとのコラボレーション・・・誰か取り組んで見ませんか!

レポート&写真: 志智 俊介

「アーカイブとデザイン」展

期間 2009年2月11日(祝・水)~12日(木)

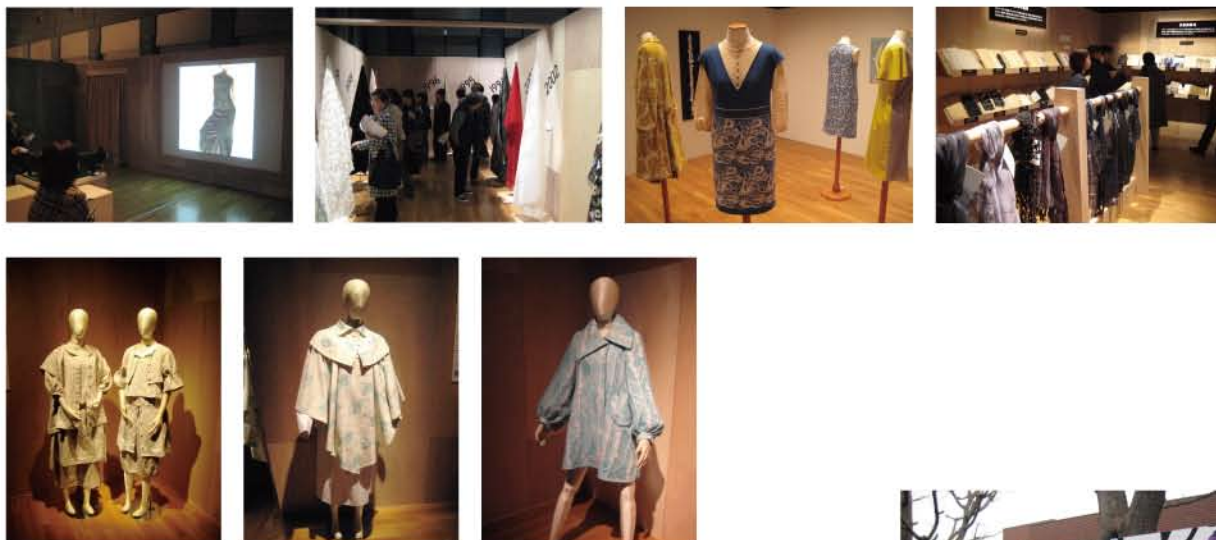
会場 スパイラルホール 東京青山

主催 中小企業基盤整備機構

後援 経済産業省

中小企業基盤整備機構によるイベント、目的は繊維産業業界全体が相互関連をはかりつつ、効果的に人材の確保・育成を図ることがもめられ、日本の意匠と技術を次世代に継承する必要性のために行われている。いままで行われたセミナー「ファッションデザインとテキスタイルの関連性」の講師5名の作品紹介と応募の中から選ばれた4名の桐生産地で布を製織したものを使った衣装の展示が行われた。展示はベニヤ版に囲まれた迷路を一つ一つ回りながら、近距離で作品を直に手で触れる事ができる展示で興味深かった。5名の講師名は梶原加奈子、須藤玲子、皆川明、皆川魔鬼子、宮本英治。

記: 豊方



「生活と芸術—アーツ&クラフツ展」

開催 2009年1月24日(土)~4月5日(日)

場所 東京都美術館

主催 東京都美術館、朝日新聞社



19世紀後半にイギリスで興ったデザイン運動「アーツ&クラフツ」の広がりをも第1部の舞台イギリス、第2の舞台オーストリアのウィーン工房などのヨーロッパ各地、第3部は民芸の日本と作品総数280点で展示されている。私が若い時よく通った、世界最大級の装飾美術館であるピクトリア&アルバート美術館の所蔵作品が中心となっています。ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ、聖ゲオルギウス伝ステンドグラス・パネル1862年頃やウィリアム・モリス、ジョン・ヘンリー・ダル、フィリップ・ウェブ、タペストリー「森」1887年は見応えがありました。しかしなんとといっても注目は私自身図案を制作している事もあり、ファブリック、壁紙、図案原画である。今迄ライセンス制作の為数えきれないくらいモリスの図案を制作してきて、19世紀後半のファブリックや木版制作の壁紙は見た事がありましたが、水彩で描かれた図案は初めて見ました。

今では見慣れた作品ですが、資料など何も無い時代に、植物を参考にデザインした事を考えると当時はかなり画期的なことだと思えます。もちろん柳宗悦らが昭和初期に建てた「三国荘」は当時かなりモダンであったことは想像できます。

「役に立たないもの、美しいと思わないものを家に置いてはならない」ウィリアム・モリスの言葉は100年以上たった今でも、現代の装飾デザインに受け継がれ続けていると思えます。

記: 豊方